室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

モンゴル語『大蔵経』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-12-03 キーワード (Ja): モンゴル語『大蔵経』, 成立過程, 内容, 装飾, 挿絵, 版画 キーワード (En): 作成者: デルヒ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2698

北海道言語文化研究
No. 9, 23-30, 2011.
北海道言語研究会

モンゴル語『大蔵経』について

デルヒ

On the Mongolian Ganjuur and Danjuur

Delehei

要旨：本稿では、モンゴル語『大蔵経』の成立の歴史を顧みて、その内容及び装飾、挿絵と版画の特徴等をそれぞれの角度から丁寧に説明するともに、それが持つ価値について述べるものである。

キーワード：モンゴル語『大蔵経』　成立過程　内容　装飾　挿絵　版画

1.　序論

モンゴル語『大蔵経』はインドにおいて成立した仏典が８世紀以降の数世紀にわたって、サンスクリット語原典のモンゴル語訳及びウイグル語訳、チベット語訳や中国語訳からの重訳を含む仏典の集成である。特に、仏教を取り入れるにあたって、サンスクリット語経典の原典からモンゴル語へ逐語訳的に翻訳がなされたこともあり、インド仏教の原典解明にとって不可欠な資料とされている[1]。モンゴル語『大蔵経』の構成は、『ガンジョール』（律と経）と『ダンジョール』（論）からなっており、モンゴルでそれぞれ『ガンジョール』（γanjuur），『ダンジョール』（danjuur）と言う。その内容は古代インドの三蔵及びチベット語『大蔵経』の内容ばかりでなく、それ以外のモンゴル語翻訳者たちの作品も包括しておる。本論文では、モンゴル語『大蔵経』の成立の歴史を顧みて、その内容及び装飾、挿絵と版画の特徴を検討してみたい。

2. モンゴル語『大蔵経』の成立過程

モンゴル語『大蔵経』は大きく分けて三つの段階を要して成立したと考えられる。すなわち、初期時代（８世紀－１２０６）のモンゴル地域に興亡したモンゴル・トルコ系諸民族の仏典との接触の段階、中期時代（１２０６－１６４４）のモンゴル帝国、元朝と北元のモンゴル語『大蔵経』翻訳事業の段階、及び後期時代（１６４４－１９１１）の清朝の整理、増補、校正、開版による完成の段階である。

[1] モンゴル語『大蔵経』は、インド学者ラグ・ヴィーラ氏とローケシュ・チャンドラ氏にとってサンスクリット語原典の整理、増補、校正を行う際の底本並びに参考として用いられた。

2.1. 初期時代

モンゴルへの仏典の伝来時期に関しては、仏教の前後期及びわれわれの手元にある情報から見て、遥か八世紀ごろと考えられる。仏教史書『ガンジョール通読源起録』では、「ガンジョール」の仏説毘奈耶経をインドの班第達からサマゲハセナらクシャーンの八人の僧侶が受け取り、彼らからカリヤナラケザダ（Kalyanaraktsa）らウイグルの２０人の僧侶に、そして彼らからオイバ・ロソルサンジャイブムらチベットの僧侶が受け取ったことを記している[2]。また、モンゴル仏教史学者ジャバ・ダムデン・ガバチョウ（１８９７-１９３７）の『Altan debter』では、ソグドの教師たちがウイグル人とモンゴル人に字を書くこと、読むこと、及び仏典を自分たちの言語に翻訳することを教えた。その時、「ウイグル人とモンゴル人がソグド文の善教論（ガンジョール）を読む際に、インド語と自分たちの言語を混ぜて翻訳した…、それで、現在わがモンゴルの経文がインド語、ウイグル語、モンゴル語を混ぜるようになった」と記されている[3]。

以上の仏教史書の記述などから、インドの三蔵と言う仏典が８世紀の時から中央アジア及び西域を経由して、モンゴルへ伝来したということが考えられる。

2.2. 中期時代

中期時代に集大成された『ガンジョール』の翻訳、編集、校訂過程を三段階に分けて考えることが出来よう。

その第一段階は、チンギス・ハーン（１１６２-１２２７）、オゴタイ・ハーン（在位１２２９－１２４１）、グユゲ・ハーン（在位１２４６-１２４８）が政治的な意図を目的とし、常に仏教に優遇政策を打ち出し、仏教僧侶および彼らが伝える教法に興味を持つようになった。そして、チンギス・ハーンの孫ホデン太子は、チベットよりかねて令名高きサキャ派の高僧サキャ・パンチェンを招き、１２４７年、両者は蘭州に集まって相会した。このできごとをもって、モンゴルへのチベット仏教公伝とすることができる。下って高僧サキャの宗教的活動に伴い、仏典のモンゴル語訳が必要不可欠となることは言うまでもないと思うが、今のところ実証性に欠け物証と見なされていない。

その第二段階は、フビライ・ハーン（１２１５－１２９６）が即位すると、サキャ派のパクパ（１２３５－１２８０）が元の帝師に任じられた。その後仏教が国教と定められると共に、チベット仏教の寺院も次から次へと建てられ、モンゴル諸部族に広く浸透した。以来、サンスクリット語原典及びチベット語訳、ウイグル語訳や中国語訳からの重訳を含む仏典がモンゴル語へ翻訳されるなど、チベット密教系の仏教研究も大都（北京）を中心にして盛んに行われた。現存史書『エルデニ·イン·トブチ(蒙古源流)』、『ドッソンのモンゴル史』の記述によると、ウルジト·ハーン(在位１２９７―１３０７)、ハイサン·フルゲハーン(在位１３０８―１３１１)の時、サキャ高僧チオイジオドセルらが

[2]「ガンジョール目録-善縁者円満」（チベット文写本）。

[3]［蒙古国］勒.霍尔勒巴托尔；阿拉坦巴根编译（１９９０）「藏文甘珠尔·丹珠尔及其在蒙古地区的传播」『内蒙古社会科学』哲学社会科学版　第２期

『ガンジョール』の大部分及び『ダンジョール』の一部分のモンゴル語訳を完成させた[4]。

その第三段階は、北元初めの二百年の間にモンゴル仏教が一時期壊滅状態であったため、仏典のモンゴル語訳にも影響を与えた。その後、アルタン・ハーン（１５０７－１５８２）の時代にダライラマ三世ソナム・ギャツォ（１５４３ー１５８８）がモンゴルに招請された事やゲルクパ教がモンゴルへ伝播された事等によって、モンゴルの訳経は次第に盛んになり、１６０２年-１６０７年にシレート·グーシ·チョルジとアナンダ·アユーシ·グーシ等によって最初のモンゴル語写本『ガンジョール』が完成され、仏典のモンゴル語訳は全盛期を迎えた。これをモンゴル年代記『アルタン·ハーン伝』（AQT）に「壬寅年（１６０２）から丁未年（１６０７）にかけて、ナムタイ·セチェン·ハーン、ジュンゲン·ハトンとホン·タイジらが、シレート·グーシ・チョルジ、アユーシ・アナンダ・マンジュシリ·グーシ等と三トウメンの通事や賢者に、百八帙の『ガンジョール』をモンゴル語に翻訳させて、書籍となして安置した」と記されいる[5]。

そして、リグデン·ハーン（在位１６０４-１６３４）の時代、グンガオドセル、サムダン·センゲをはじめとする人々が、リグデン·ハーン（１５９２－１６３４）の勅命によって、１６２８年-１６２９年にかけて有名な写本金字モンゴル語『ガンジョール』が完成したとモンゴル史書『アルタン·トブチ』、『アルタン·エリヘ』とイシバルジョルの『モンゴル仏教史』などに記録されている[6]。当時、この『ガンジョール』は、モンゴル地域における最上の「大蔵経」として写本でながらく流布していた。

2.3. 後期時代

清朝時代、仏典のモンゴル語訳が新しい発展時期に入った。康熙五十六年から五十九年（１７１７-１７２０年）において、１６８３年北京版『チベット大蔵経』を底本にし、リグデン·ハーン（在位１６０４-１６３４）時代の写本金字モンゴル『大蔵経』を整理、増補、校正して、モンゴル語木版『ガンジョール』が北京で開版された。漢文資料では『如来大蔵経』又は『藩蔵経』とも言われる。このモンゴル語木版『ガンジョール』が１０８帙と『ガンジョール目録』１帙になり、収めた経典が１１６１種に至る。

モンゴル語木版『ガンジョール』の新版が完成後、『ダンジョール』のモンゴル語訳と刊行が緊急の課題として強く要請されていた。乾隆皇帝（在位１７３６－１７９５）の勅命によって、ザンギャー·ホトクト二世·ロルビドルジ（１７１７-１７８６年）が、乾隆７年（１７４２）蔵蒙対訳辞典『翻訳名義集』を完成させた。そして、ザンギャー·ホトゴト二世·ロルビドルジとロブサン·ダンビ·ニマ（１６８９－１７６２）を中心とするモンゴルの仏教界の先達たちの努力で、乾隆七年から十四年（１７４２-１７４９年）まで８年かけて、モンゴル語木版『ダンジョール』の新訳、及び改訳がなされ刊行された。底本は１７２４年北京版チベット語『ダンジョール』である。このモンゴル語木版『ダンジョール』が２２５帙になり、収めた作品が３８６１種に至る。

---

[4] 金岡秀友；胡樹译（1991）《蒙古文大藏经的形成过程》《世界宗教資料》第 2 期、参照。
[5] 吉田順一他『「アルタン·ハーン伝」訳注』風間書房、1998
[6] M.エルデニバートル「リグデン·ハーンとモンゴル仏教」『三康文化研究所年報』32,平成１３年

3. モンゴル語『大蔵経』の内容

『大蔵経』を経、律、論の三蔵に分類するのは一般的であるが、モンゴル語『大蔵経』の内容の分類は少し異なっている。すなわち『ガンジョール』及び『ダンジョール』の二部に大別する。『ガンジョール』とは仏説諸種の経典であり、『ダンジョール』とは祖師部或は論述部と訳し、論述した研究的なものが主となっている。更に内容によって『ダンジョール』を細分すると写本『ガンジョール』と木版『ガンジョール』の分類方法が異同になる。ここでザ·カ·カシャネンコのモンゴル写本『ガンジョールの目録』とルイス·レケトのモンゴル木版『ガンジョールの目録』を比べてみると次のようになる。

写本『ガンジョール』の分類は①秘密経部２６帙５２３件、②大般若部１２帙１２件、③第二般若部（二万五千頌）４帙４件、④第二大般若部（一万八千頌）２帙３件、⑤八千頌１帙１件、⑥一万頌２帙１件、⑦華厳経部６帙１１件、⑧寶積経部６帙４２件、⑨律師戒行経部１３帙１１９件、⑩諸品経部４０帙１６７件、全部１１３帙８８３件の作品から構成されているのに対して、１７２０年の北京版モンゴル語『ガンジョール』の分類は①秘密経部２５帙 745 件、②般若経部２２帙 47 件、③寶積経部６帙 50 件、④華厳経部６帙７件、⑤諸品経部３３帙 245 件、⑥律師戒行経部１６帙 35 件、全部で１０９帙１０６１件作品から構成されている。現存するモンゴル語『ガンジョール』は、

①モンゴル国：国立図書館保管写本７６帙、北京木版１０７帙[7]。

②中国：国立図書館保管北京木版１０８帙。民族図書館保管北京木版１０８帙。内モンゴル図書館保管北京木版１０８帙。内モンゴル大学図書館保管北京木版１０９帙。内モンゴル師範大学図書館保管北京木版１帙。内モンゴル社会科学院図書館保管金字写本１９巻、竹筆写本１０８帙、朱墨套印写本２２帙、北京木版１０９帙。チベット・ポタラ宮保管北京木版１０９帙。内モンゴル自治区フフホト市シレト昭保管竹筆写本１０９帙。個人保管北京木版１帙。

③日本国：東洋文庫保管北京木版１０８帙。元京都帝国大学（現京都大学）教授内藤湖南（１８６６-１９３４）保管金字写本『モンゴル大蔵経』（１葉、東京帝国大学〈現東京大学〉図書館保管金字写本『モンゴル大蔵経』が１９２３年関東地震で消失した）[8]。モンゴル語『ガンジョール』の近代的研究の扉は内藤湖南によって開かれた[9]。

④イギリス：ロンドン大英博物館保管（７３頁)。ロンドン東方與アフリカ研究所保管（３４頁)。

⑤アメリカ：シカゴ極東図書館保管（７２頁)。シカゴニューベリ（ベルトルト ラウファー収集）図書館保管（１９０７頁)。

⑥フランス：パリフランス学院図書館保管北京木版１０９帙（ハンガリーのモンゴル学者ルイス·レケト教授が１９４２年にモンゴル木版『ガンジョールの目録』を出版した)。

⑦ドイツ：マールブルク国立図書館（１１９篇)。

---

[7] L.［蒙古国］勒.霍尔勒巴托尔；阿拉坦巴根编译（１９９０）「藏文甘珠尔·丹珠尔及其在蒙古地区的传播」『内蒙古社会科学』哲学社会科学版　第２期

[8] 石濱純太郎「金字蒙文蔵経金光明経断簡に就て」『支那学』第四巻 第参号 昭和二年、参照。

[9] 内藤湖南「消失せる蒙満文蔵経」大正１３年『芸文』第十五 年第３号及び第６号。

⑧スウェーデン：ストックホルム人種学博物館保管（４０頁以上)。

⑨デンマーク：コペンハーゲン王室図書館保管(写本 300 頁)。

⑩ロシア：ロシア科学アカデミーアジア研究院保管写本 113 帙（ザ･カ･カシャネンコが１９９３年にモンゴル写本『ガンジョールの目録』を出版した)。ブリヤード社会科学院図書館保管写本 113 帙。

１７４９年の北京版モンゴル『ダンジョール』を①頌賛部，②密教部と③般若部に分類する。頌賛部に１帙６３件、密教部に８６帙３０１７件、般若部に１３６帙７８１件で、合わせて２２５帙３８６１件作品が含まれている。現存するモンゴル語木版『ダンジョール』は：

①モンゴル国：国立図書館保管北京木版２２６帙（B.リンチンが１９６４年と１９７４年に、モンゴル語木版『ダンジョールの目録』を出版した)。

②中国：内モンゴル図書館保管北京木版２２５巻。内モンゴル社会科学院図書館保管北京木版２２５巻。

③日本国：京都大学保管北京木版[10]（一部）

モンゴル語『ダンジョール』についての近代的研究は、ロシアのモンゴル学者 B･Y･ウラヂミルツォフが 1926 年にモンゴル語「ダンジョール」という論文を発表以後のことになる。

4. モンゴル語『大蔵経』の装飾、版画と挿絵

モンゴル語『大蔵経』は早期インドとチベット文化の影響を受け、横長形をしている、すなわち梵挟本である。北京版モンゴル語『ガンジョール』は全部で１０９帙で、各帙が経葉、内層護経板、内経衣、外層護経板と外層経衣から組み立てられている。経葉は両面朱色印刷品で、長さが 72.５cm、幅が 23. 3cm である。内層上下護経板は木板に金黄色の綿布を貼って作成されたもので、長さが 72.５cm、幅が 23. 3cm、厚さが２cm である。内層上護経板の中央の凹み入った幅１６cm、長５８.５cm 横長形の板面に金黄色のモンゴル文字の仏に頂礼する、法に頂礼する、僧に頂礼するという敬語及び梵文字を音訳した本帙の第一部経名と巻数が左から縦に書かれている。両側に端正な彩色の尊像が一尊ずつ描かれていて、尊像ごとの右の下角にモンゴル文で､左の下角に満州文字で尊像名が書かれ､尊像の右の框辺に漢字、左の框辺にモンゴル字で経名と葉数が縦に書かれている。内層下護経板の中央の凹みの入った幅１６cm､長さ５８.５cm の横長形の板面に五つ尊の彩色の護法神の図像が描かれていて、尊神像ごとの右の下角にモンゴル字で、左の下角に満州文字で尊像名が書かれ、右框辺に漢字、左框辺にモンゴル文字で経名と葉数が縦に書かれている。内層上下護経板の中央の凹みの入った板面が分別に鮮やかな赤、黄、白、緑色の三層精製の織錦でかぶせてある。整巻の経葉が全体的につりあいがとれて整っていて、経葉の四周に吉祥図案が描がれている。外層上下護経板は木板に赤色の漆塗りをして作成されたもので、上護経板の上は弧状、下は平、下護経板の上は平、下は弧状、長さが７７.５cm、幅が２７. ５cm、厚さが２.５cm である。経葉の損傷を防ぐために、先に経葉と経板を綿布経衣で包んで、外層経板で挟む。次に長さ

[10] 石濱純太郎「京都帝国大学所蔵蒙文丹殊爾記」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』 昭和６年、参照。

が約２ｍの経帯で経巻を梱んで、再び１．５ｍ正方形の黄色の経被で包んだ後、黄色の箋に経名と巻数を書いて、包みの上に貼っている。

北京版モンゴル『ダンジョール』は全部で２２５帙で、各帙が経葉、内層護経板、内経衣、外層護経板と外層経衣から組み立てられている。経葉は両面朱色印刷品で、長さが 72．5㎝、幅が 23．3㎝である。内層上下護経板は木板に赤と緑色の花の印を入れた黄色の織錦を貼って作成されたもので、長さが 72．5㎝、幅が 23．3㎝、厚さが２㎝である。内層上護経板の中央の凹み入った幅１６㎝、長さ５８．５㎝ 横長形の板面に三尊像が印刷されて、尊像ごとの右の下角にモンゴル文で、左の下角に満州文字で尊像名が縦に書かれている。内層下護経板の中央の凹み入った幅１６㎝、長５８．５㎝ 横長形の板面に２尊の彩色の護法神の図像が印刷されていて、尊神像ごとの右の下角にモンゴル文字で、左の下角に満州文字で尊像名が縦に書かれている。内層上下護経板の中央の凹み入った板面が分別に鮮やかな赤、黄、白、緑色の三層精製の織錦でかぶせてある。

モンゴル語『大蔵経』の中に大量の精美な版画挿絵作品がある。北京版モンゴル『ガンジョール』の版框のサイズが縦１６．５㎝×横５９㎝、帙経巻ごとの第一頁の版框の四囲に雲状の紋が、最後の頁の版框内の文字がない所に様々な絵が印刷されている。内層上護経板の版框内に二尊像、内層下護経板の版框内に五尊像が描かれていて、全部の挿し絵が７５６枚になる。尊像ごとの右にモンゴル文で、左に満州文で尊名（この満州文の尊名はほんとの満州文字の尊名ではない、右側のモンゴル文字の尊像名を読み下したものである）が縦に書かれている。

北京版モンゴル『ダンジョール』の版框のサイズが縦１７㎝×横５９㎝、帙経巻ごとの第一頁の中央の横長形の板面にモンゴル文字の仏に頂礼する、法に頂礼する、僧に頂礼するという敬語及び梵文字を音訳した本帙の第一部経名と巻数が左から縦に書かれている。両側に端正な彩色の尊像が一尊ずつ印刷されていて、尊像ごとの右の下角にモンゴル文で、左の下角に満州文字で尊像名及び尊像の右の框辺に漢字、左の框辺にモンゴル文字で経名と頁数が縦に書かれている[11]。内層上護経板の版框内に三尊像、内層下護経板の版框内にモンゴル文字の仏に頂礼する、法に頂礼する、僧に頂礼するという敬語及び梵文字を音訳した本帙の第一部経名と巻数が左から縦に書かれている。両側に端正な彩色の尊像が一尊ずつ印刷されている。北京版モンゴル語『ダンジョール』の全部の挿し絵が１１２０枚に及び、尊像ごとの右にモンゴル文で、左に満州文で尊名（この満州文の尊名はほんとの満州文字の尊名ではない、右側のモンゴル文字の尊名を読み下したものである）が縦に書かれている。

このことは、モンゴル人が『大蔵経』の装飾、版画と挿絵に心血を注いできたことの例証となったのみならず、内容的にも希少価値をもつものである。

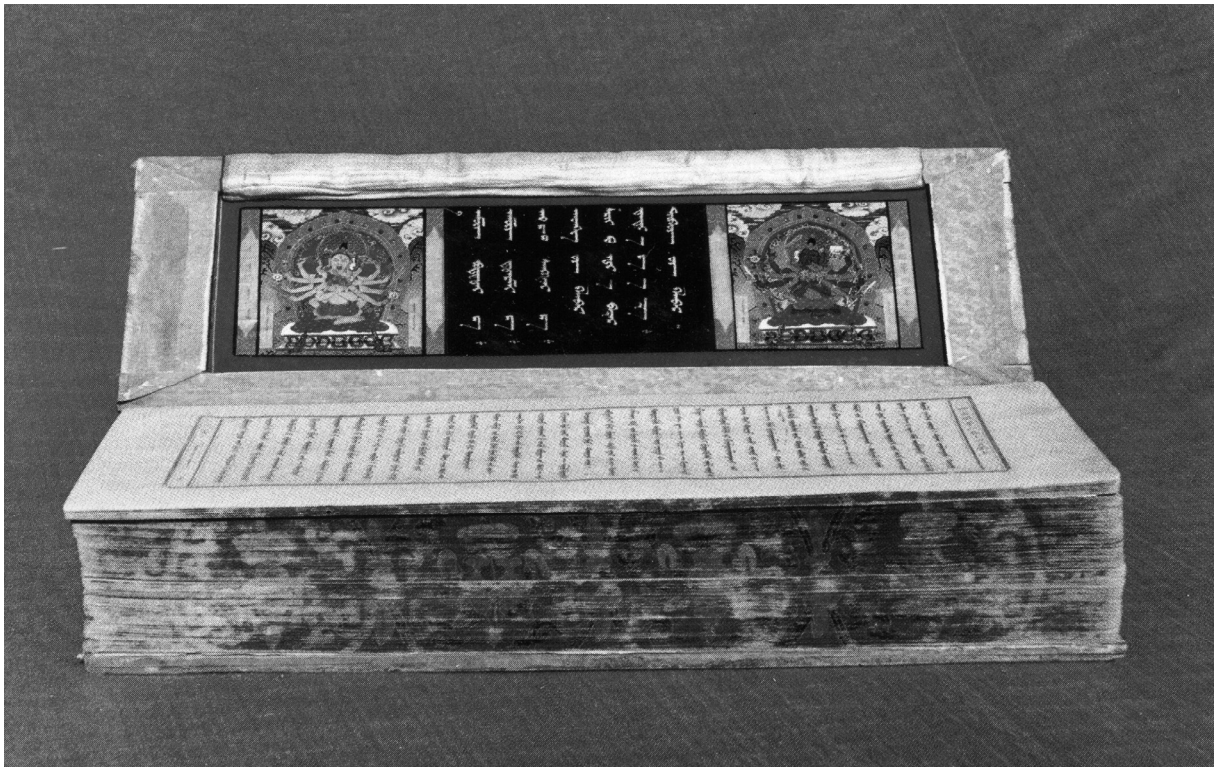
---

[11] 内モンゴル図書館保管北京木版モンゴル語『ダンジョール』の彩色の尊像が印刷されていて、モンゴル国立図書館と内モンゴル社会科学院図書館保管北京木版モンゴル語『ダンジョール』の彩色の尊像が描かれている。

5. 結語

以上はモンゴル語『大蔵経』の成立した歴史の歩みをたどり、その内容及び分類のあり方を述べると共に、モンゴル語『大蔵経』の装飾、挿絵と版画の特徴などを明らかにしたものである。モンゴル語『大蔵経』は、モンゴルの仏教界の先達たちの努力で、およそ千年をかけて完成されたものであり、仏教経典翻訳の歴史及びモンゴル文化の歴史に重要な位置をもっている。今日、世界の学者に注目されている『大蔵経』であり、モンゴル民族のみならず全人類の大きな文化遺産あると言ってもよいだろう。

参考文献

1. D.Čeren Sodnam （2000）«mongγol-un burqan-u šašin-u uran ǰokiyal» arad-un qeblel-un qoriy-a.
2. «mongγol Ganǰuur·Danǰuur-un γarčaγ» nayiraγulqu komis（2002）«mongγol Ganǰuur·Danǰuur-un γarčaγ»（degedu dooratu）alus-un bar-a keblel-ün qoriy-a
3. Čoiǰi （1998）« mongγol-un burqan-u šašin-u teüke»-yeke mongγol ulus-un üy-e (1206-1271), öbür mongγol-un arad-un qeblel-un qoriy-a.
4. Čoiǰi （2003）« mongγol-un burqan-u šašin-u teüke » - yuwan ulus-un uy-e (1271-1368), öbür mongγol-un arad-un qeblel-un qoriy-a.
5. Delehei（2008）《mongγol Ganǰuur·Danǰuur-un orčiγuluγdaǰu bötögegdegsen teüke》,《öbür mongγol-un yeke suryaγuli-yin erdem šinlgen-ü sedgül》(mongγol qeblel) (1) P 25-31
6. 石濱純太郎（1927）「金字蒙文蔵経金光明経断簡に就て」『支那学』第四巻 第参号 52-80 頁
7. 橋本光宝（１９３８）『ラマ教大蔵経』蒙古学（２）106-107 頁
8. 金岡秀友；胡樹译（1991）《蒙古文大藏经的形成过程》《世界宗教資料》第 2 期 30-36,54 頁
9. [蒙古国]勒.霍尔勒巴托尔；阿拉坦巴根编译（１９９０）「藏文甘珠尔·丹珠尔及其在蒙古地区的传播」『内蒙古社会科学』哲学社会科学版　第２期　92-99 頁
10. 吉田順一他（1998）『アルタン·ハーン伝』訳注　風間書房
11. M.エルデニバートル（2001）「リグデン·ハーンとモンゴル仏教」『三康文化研究所年報』32
12. 嘉木揚凱朝（２００４）『モンゴル仏教の研究』法蔵館

執筆者紹介
所属：中国　内モンゴル大学図書館モンゴル学文献情報センター
Email：derehei@yahoo.com.cn